怜チャンとただし先生の不毛な恋

mugi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怜チャンとただし先生の不毛な恋

【Ｎコード】

Ｎ９３５２Ｈ

【作者名】

ｍｕｇｉ

【あらすじ】

むかつくことに先生と恋愛をして振り回され気味の今日この頃、怜ちゃんは先生のメールを待っていた。

第1話：メールの恋（前書き）

怜ちゃんはメールを見ていた。

第1話：メールの恋

１日６回メールを見る。それが怜ちゃんの日課だ。
明け方６時。朝１０時。昼１時。夕方６時。夜９時。就寝前１１時。
あ、やっぱ今日きてない。
最新型の薄いノートパソコンを持ち歩いては起動させないようにするのに苦労する。
赤い長靴のねこの絵をした黒いバックを持って、その中に教科書やパソコンを入れている。
あの人が言った。このバックが怜ちゃんのトレードマークだと。
黒髪の高校生らしいカットのロングヘアーをなびかせて歩くのが怜ちゃんの今の流行だ。そうすれば、男子、女子関係なく視線を受ける。吃驚するほど顔立ちが良い訳じゃないけど綺麗だとか、女友達にはよく言われる。女友達の言葉を真に受けるほど子供じゃないけど、半分くらい当たってるって事は自覚してる。カマトトぶってる女は嫌われるご時勢だ。
このパソコン、『サクラ』と呼ばれる限定機種カラーはその名の通りシルバーの強い薄いピンクで友達からの受けが良い。怜ちゃん自身もお気に入りだ。教室に入って１０時になるのを待ってからパソコンを開く。この学校はパソコンを使う事を学則に入れている。パソコンは今の世代、ノート代わりだ。
最近はパソコンのお陰で時が経つのが速くなって欲しいと思うようになった。いつの間にかピーターパンのウェンディーではなくなってしまった。
パチリと『サクラ』の電源が入ってメールをクリックする。
この時心臓はドキドキだ。入ってますように、入ってますように！って本気で心に祈る。
『新着メッセージ１通』

けれどここで喜ぶ訳にはいかない。もしかしたら宣伝メールかもしれない。
『メールの確認』をすると一番上の件名が『怜チャンおはよう』になっている。
怜ちゃんはこの時、ぶわっと心にさざなみが起きる。
熱いようなぐちゃぐちゃな感情が胸を塞ぐ。
そしてやっとメールを開くのだ。

『おはよ！昨日メールくれなかったじゃん。
どーして？仕事のことなら心配しなくてもいいのに。
っていうか、ゴメンね。怜チャン。
さみしかったでしょー？』

むかつくことだがそれはもうさみしかった。
何も手につかなかった。枕の横にパソコン置いて、ベットでごろごろして抱き枕を抱きしめることしかできなかった。
涙が心の中でダラダラ流れているのを知りながらキーを打つ。

『　ばか。　きらい。
さみしいのでいっぱいだったのに。
あほ』

するとすぐに返信がくる。

『ごめんごめん。おこんないでよ。
いつもみたいに　おはようって言って』

『ヤダ。　思い知れ！』

強気に出たからか、相手のメールの返信が少し遅くなってほっと

息を吐いた。なんでだかメールは顔を見て話すより疲れる。
普通の相手ならこんなこと言ったら嫌われるけど彼は違う。何処のチャットから拾ってきた相手かと、文面を見れば疑われるけどそんなことはない。

『ヤダねー。悪女だね。怜チャン。
それでも大好きだよ。おはよう怜チャン』

『――――……おはよう。センセ』

一時間目の地理の教師と目が合った。

第1話：メールの恋（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
良かった点、悪かった点ご遠慮なく感想をお寄せください。

第2話：恋の始まり（前書き）

怜ちゃんと先生の馴れ初めはこんな感じだった。

第2話：恋の始まり

怜ちゃんは、廊下を少し速足で歩く。
向こうの校舎に黒髪の男が見えた。他の男子より大人びて見える。当たり前だ。彼は教師だ。
平凡でさっぱりした感じの男だ。けれど、ああいう若い教師は結構ウケる。
だって好きになってしまった。もう、既に、怜ちゃんが中毒になってしまったのだ。
誘ってきたのは先生のほうだ。でも、怜ちゃんのほうなのかもしれない。

夕暮れの教室だった。部活の掛け声が校庭から響いていて、硝子の花瓶が、赤い光に揺れていた。怜ちゃんは先生に頼まれた仕事を面倒だけれどこなしていた。
先生は唐突に言った。
「怜チャン。女に見える」
唖然とした。この先生は何を言ってるんだろう。先生の目はひどく真っ直ぐだった。
ヘンな事でもされるんじゃないかって思った。少し怖かった。けれど先生の言葉はおかしいほど熱が無くて、怜ちゃんは逆に落ち着いていった。
怜ちゃんは平静に言葉を返した。
「何言ってんすか」
先生は、ぼおっと外を見ていてつまらなそうに呟いた。
「ほかの女子は乳くさいね。男子は女に飢えてるし」
「はぁ」

そう返すしかなかった。
「女子だって男に飢えてるの丸分かり」
それはそうだ。みんな青春をやっている真っ最中なのだから。
そう言って先生は視線を怜ちゃんに戻した。
「でも怜チャン。怜チャンはちがう」
怜ちゃんはさっきから先生が怜ちゃんの名前を呼ぶたび異国語を聞いているように思えた。
「怜チャンは女にみえる」
そこで先生はシニカルに笑った。
「それとも、俺、怜チャンがタイプなのかな」
その目が寂しそうに見えて、怜ちゃんは戸惑った。
けれど怜ちゃんはハッキリと言った。
「おんなじだよ。あたしだって彼氏ほしいし、セックスしたいし、男にめちゃくちゃに甘やかされたい。ねぇ、先生。女の子はいつもそういうことかくしてるの。それって変かな？」
「そうだね。でも怜チャンはもっとずっと人に飢えてる」
「センセがそうなんじゃないの？」
「そうかもしれないね。でも、もし怜チャンが少しでもさみしいって感じてるのなら笑ってごらん。そしたら先生が怜チャンのこと散々甘やかしてあげる」
それが、先生の告白だったのかもしれない。
そんなこと言われてつい、笑ってしまったら先生は手をギュッと握ってくれた。
「これが最初の約束」
そして、やっとこのさみしい男は心から笑ったのだ。
「怜チャン。友だちから始めよっか」
怜ちゃんも今の状況に自覚が出てきて、手が熱くなっていくのが分かった。
「友だちはこんなことしないでしょ」
「怜チャンかわいいからさ」

真顔でさらりとこんなことを言う先生をちょっと疑って、先生と怜チャンの恋ははじまった。

第2話：恋の始まり（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
良かった点、悪かった点ご遠慮なく感想をお寄せください。

第3話：初めてのメール（前書き）

地理室が二人の密会場所だった。

第3話：初めてのメール

学校には、地理室というものがある。大きな地図や地球儀たちが置いてあるところだ。その棚の向こう側は何故か空間が出来ていて、もっと古めかしい、授業には使われないような教材が置いてある。そこは人が来ない絶好の逢引場所で、怜ちゃんは何度もそこで先生と会った。逢引。いや、そんな色っぽいものじゃなかった。怜ちゃんと先生は普通の恋人同士じゃなかったかもしれない。

逢引場所に机と椅子を2脚持ち込んでそこで他愛無(たわいない)いことを話した。初めのころは怜ちゃんはすこし緊張しながら話した。

「何、借りてきたねこみたいにしてんの。俺たち、こいびとでしょ」

頬杖(ほおずえ)突きながら先生は余裕の表情で笑ったことがあった。そのとき、怜ちゃんはそれが気に食わなくて、頬杖突いている肘を勢い良く払ってやった。かくんと、先生はバランスを崩して顔を机に激突させそうになった。胸がすいて、あははと怜ちゃんはわらった。それから、怜ちゃんは先生に遠慮しなくなった。

ある日、先生は繰り出した。

「パソコンでメールしよっか。今日何があったとか、話したいことといっぱい話すやつ。ケータイじゃなくって、2人だけの、専用のノートパソコン欲しい」

あんまり先生がニコニコ言ったから怜ちゃんはいいよ、とぶっきらぼうに了承してしまった。

先生がこんなこと言ったから恋人兼メル友になってしまった。でも、嬉しかった。もっと先生に近づけるような気がした。

それで、ノートパソコンの『サクラ』を買うことになって、おこずかいがやばいことになった。でも、あれこれ困るのもふしぎと嬉しくて、初めて先生からのメールが来たときはなぜか胸がいっぱい

になって少し泣いた。

『怜チャン。はじめまして。ただしです』

初めてのメールはこんな感じで、ずっと覚えてる。
なんてさえないメールなんだろうって思って返信した。

『ただし先生。だいすきだよ。
世界で一番』

怜チャン。女にみえる。
それがはじめて怜ちゃんの中に『怜チャン』が生まれた瞬間だった。
無防備な甘えたがりなオンナノコ。なのにリアルじゃ素直になれない女の子。

『だからセンセ。もうすこし近づいて。最初の約束覚えてる？』

胸の辺りがきつくなった。覚えてないって言ったらどうしよう。
枕にしがみついて返事を待った。

『　　覚えてるよ。　　』

先生の静かなあの声が聞こえた気がした。

『怜チャンをむちゃくちゃに可愛がる事』

一転してそんなこと言うから意地悪な怜ちゃんがすこし顔を出した。

『ばーか　　すき』

だいすき。だいすき。だいすき。

甘いちいさなおんなの子の声で、そんな言葉が体中をめぐってる気がした。

そのまま、怜ちゃんはとてもきもちよくなって眠ってしまった。

第3話：初めてのメール（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
良かった点、悪かった点ご遠慮なく感想をお寄せください。

第４話：夏の心（前書き）

夏休みの宿題を先生にみてもらっていた。

第４話：夏の心

二年三ヶ月間の恋。期間制限有りの恋。でも、のめり込んじゃいけない何てこと無いでしょう？だって怜ちゃんは初恋で、先生もたぶん恋してたから。怜チャンをあいしてくれたから。

「怜チャンってさー色っぽいよねー」

夏が来て、怜ちゃんの髪が濡れて乱れていた頃、先生が言った。

その日はまだ髪をカットしに行く前で、髪の量が多かった。しかも少しうねってしまっていて、怜ちゃん的には野暮ったいだろうと思っていた。

今日は地理室に夏休みの宿題をしに来ていた。先生が教えてくれるからサクサク進んだけど、時々答えを言っちゃうから困った。

「せんせい、答え言っちゃダメ」

怜ちゃんはふくれて言った。これじゃあ勉強してる意味がなくなってしまう。

「なんでさ。早く進んでいいじゃん。それに怜チャン解くのおそいよ」

「でもいいの。身にならなくなっちゃうじゃん」

先生は、ぼーっと怜チャンを見て何だか納得したように頷いた。

「怜チャンてマジメなのね」

その通り、怜ちゃんは意外と真面目なのであった。でも成績はたいしたことない。でも怜ちゃんは現状に満足していた。

「怜チャン、進路は？」

「てきとーなとこいく」

先生はそっか、と言って手を伸ばしてきた。

長い黒髪を先生の指が掬い上げる。

怜ちゃんは視線を先生へと動かすと、目が合った。
びくぅ、と怜ちゃんの体が震えて、目が見開かれた。
「ビクッ…た。なに、センセ」
先生はやさしい顔をしていて、怜ちゃんの髪をクルクルもてあそんだ。
「言ったでしょー。髪の毛色っぽい」
そんなこと言ってなかったような気がしたが、怜ちゃんは意地で宿題を続けた。
「怜チャンって酷(ひどい)いよねー。構ってくんなきゃ」
大人の余裕ってやつなのか、先生は平静に髪をいじり続けた。
「先生ってさ、手つきエロいよね」
怜ちゃんに経験はないけれど、怜ちゃんの黒髪を指にまきつけてはもてあそぶ先生の手は官能的だと思った。
「俺もね、てきとーなとこいって、てきとーに先生になったの」
うん。と怜ちゃんは頷いた。
「でも、いいもんだね。そうやって、なーなーに生きてくのは。宿題は全部やっちゃだめだよ。
半分くらいずるして誰かに頼ってやってもらうんだ。
そうすると、ちょっとラク」
いつの間にか三つ編みができていて、似合うんじゃない？って先生が言った。
怜ちゃんはもっと綺麗になろうと思った。
この先生をいつまでも自分のところに留めて置けるように、この先生がどっかに行ってしまわないように。
このとき初めて怜ちゃんは先生にぎゅうぎゅうに抱きしめてもらいたいと思った。
こころが熱くなっていた。

第４話：夏の心（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
良かった点、悪かった点ご遠慮なく感想をお寄せください。

第5話：冬の雨（前書き）

あなたのために走り回っていた。

第5話：冬の雨

その日は雨が降っていた。午前中なのに授業はすごくダルかった。けれど怜ちゃんはとても偉いので、サボる、ということはしたことが無かった。ほんとうによく雨が降っていて、怜ちゃんは大きい音だなあ、と思っていた。台風が、来ていた。

ジジジッといきなりパソコンの電子音がして現実に戻される。不審に思ってメールを見ると、1件メールがきていた。たぶん、先生だろう。いつも、内容なんて他愛の無いことなのに、それが愛おしかった。だから、たからものをあけるようにそっとクリックした。

途端（とたん）、怜ちゃんの思考回路がピタッと止まった。

『怜チャン　たすけて』

たすけて？

たすけてってなに？

唖然として、静かに『サクラ』閉じた。不安な気持ちはいっぱいになって、体のすみずみにまで渡っていった。しばらく両手を握り締めていた。震えが止まらなくなって心配で、どうしよう、どうしようと思った。そして、不安なこころが爆発した。

先生がたすけてって言った。

昼休みを知らせるチャイムが鳴って、怜ちゃんは走り出した。

廊下の上に『サクラ』を開いてキーを叩いた。

『せんせい、いまどこいるの？

どうしたの？』

けれど返信は無くって焦った。

『あいたいよ。せんせい』

『さくら』を片手に持って、不安なキモチいっぱいで泣きそうになって走っていた。

地理室。職員室。階段。科学室。渡り廊下。玄関。体育館。

エトセトラ。エトセトラ。エトセトラ。エトセトラ。

息が上がって汗がだらだら出て、やっと落ち着いてきた。

ぜいぜいしながら呟いた。

「あいたいよ。せんせい」

じゃないと、怜ちゃんはないちゃうよ。

もうほとんど学校内は走り回った。午後の授業はもう始まっている。

冬なのに、ぽたぽた、汗が床に落ちた。

廊下で怜ちゃんは丸まった。泣かないように。泣かないように。

職員室玄関に怜ちゃんは体育座りをしていた。もう、下校時間は過ぎていて、雨は強く降っていたが午前中ほどではなかった。こつこつと歩いてくる音がして怜ちゃんはゆっくり顔を上げた。

「あっれ。怜チャンどうしたの、こんなところで」

先生はなんてこと無い顔で笑っていた。不思議そうに怜ちゃんに近づきながら、「今日大変だったんだよー。仕事が山にあって困った困った」と言った。

すぐに怜ちゃんは、ばっと立ち上がった。
すこし暗い、つよい目をしていた。
そして人差し指をただし先生に突きつけて強く言った。
「次はない」
そう言って怜ちゃんは冬の雨の中を走っていった。

そのあと怜ちゃんのメールを見た先生から返信が来た。

『ごめんね。怜チャン。そんなに心配してくれてたなんて気付かなかったんだよ。
ごめん。ごめんね』

怜ちゃんは、やっとベッドの上でキーをたたき出した。

『しんぱいさせないで。
せんせい　なきそうだから　１００のことばでなぐさめて』

先生は徹夜で１００のことばを捻り出して、怜ちゃんは２０のことばごとに口に出して想いを呟いた。

「せんせい。だいすきだよ」

１００の言葉のとき眠くなってぼーっとしながら怜ちゃんは思いを伝えた。

『せんせい　だいすきだよ　だから　いつだってたすけにいくから』

そして先生の返信はすこし遅れてきた。

『怜チャン。可愛すぎて今すぐぎゅうぎゅうに抱きしめたい』

煩悩にまみれたことばに怜ちゃんは最後の力を振り絞ってキーを叩いた。

『　ばか　』

第5話：冬の雨（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
良かった点、悪かった点ご遠慮なく感想をお寄せください。

第６話：大人になったら（前書き）

あたたかな幸せを感じていた怜ちゃんに、先生が言った。

第6話：大人になったら

地理室では静かな密会が行われていた。赤い長靴を履いた猫のバックが放り投げられている。そんな様子が退廃的に見えた。

先生は体育座りして怜ちゃんを後ろから抱きしめていた。怜ちゃんは目を閉じ、背中を先生に預けて温もりを確かめていた。優しいぬくもりだ。こんなしあわせが生きているうちにあっただろうか。

今まで怜ちゃんの背中は寂しくて、冷たかった。誰かの温もりを背中に感じることなんてなかった。ましてや、男の人の高い体温なんて感じたことがなかった。

先生の心臓の音が聞こえる。ひとの心臓の音なんて直に聞いたことがあっただろうか。

先生の指は怜ちゃんの髪に優しく触れている。するするとシャギーのはいった髪は先生の指を通り過ぎた。

「かみ、綺麗になったね」

「うん。先生のために切ったんだよ」

怜ちゃんは小さな愛の言葉のような甘い声を発した。

「こんなに綺麗だと、変な虫が付くかも知れない。このまま閉じ込めておきたいなあ」

先生は頭を怜ちゃんの首筋にうずめる。髪が、怜ちゃんの肌に掛かった。

「くすぐったいよ、先生」

怜ちゃんは幸せそうな表情で微笑んだ。先生はいつもこうやって甘えてくる。

けれど、怜ちゃんはふと遠くを見るような目をした。

「…先生はさ、キスしてくれないよね。甘やかすって言ってさ。キスもセックスもしない。あたしはしたいよ。キスも…セックスも」

「大人になったらね」

怜ちゃんの肩に頭を乗せた先生の表情は見えないままだ。どんな

表情をしているのだろう。
大人になったら。その言葉に不快さを覚えた。すると、違う憶測も沸いてきた。
怜ちゃんの声が少し震えた。
「…おとなになったら」
怜ちゃんはそのままの声で言った。
「おとなになったら、先生はそこにいるの？何時になったらアタシはおとなになれる？」
僅かな沈黙があった。
先生のいつもの動揺の欠片も無い声がした。
「いつか、怜チャンに先生より好きな人ができたとき」
その言葉に、怜ちゃんの心臓が急に熱を失っていった。
この人は、なんて寂しいことを言うのだろう。
怜ちゃんの瞳がキラキラと涙ぐんだ。
「擬似恋愛って訳？ふざけないでよ」
怜ちゃんは知っているのだ。先生が凍えるほど人に飢えていることを。
「本当は自分だって寂しいくせに。本気のほんきで先生が…す…き…」
なのに。と言う前に、抱き締める力が増した。
「あんまり男の人にそんなこと言っちゃだめだよ。男なんて全員馬鹿なんだから」
少し苦しげに先生は言った。
「本当に馬鹿なんだからね」
その時の先生の表情は分からなかった。なのに怜ちゃんは先生が苦しんでいるような気がした。
だから、怜ちゃんは先生の分まで苦しかった。そしてその時、恋は、相手の分まで苦しむものなのだと、怜ちゃんは知ったのだ。
だから、怜ちゃんは振り向いて、先生をきつく抱き締めた。
「こんなこと先生以外に言う訳ないじゃん。バカ」

この人がいなくなってしまわないように。この人の孤独を少しでも和らげるように、小さな女の子の体でぎゅうぎゅうに抱きしめた。

第6話：大人になったら（後書き）

読んでくださってありがとうございました。
良かった点、悪かった点ご遠慮なく感想をお寄せください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9352h/

怜チャンとただし先生の不毛な恋

2010年10月8日22時38分発行